

食

×

農

×

福

ジャクリン・ウオースウィック著「ヘレンハウス物語」が2018年9月に翻訳・発行された。この翻訳を担ったのが小児科医師の小口弘毅さんらだ。

脳腫瘍で重い障害を残したヘレン・フランシスの家族の感動的な物語で、親の限らない愛情を受けながらヘレンは、障害をはるかに超えた一人の人間として生きた。ヘレンと家族は愛し合い、お互いを必要とし、迷うことなく在宅生活を選んだことが「ヘレンハウス」が誕生する原点となったという。

この本の中では、難病の子ども

たちのために設立された「ヘレンハウス」の運営の様子や、難病や障害のある子どもと家族のための「こどもホスピス」と「レスパイト施設」創設への道筋が描かれている。

現在、英国にあるヘレンハウスは八つの寝室をもつ大家族の家で、多くの難病の親子が過ごす憩いの場となっている。レスパイト施設は単なる入所型の福祉施設ではなく、一時的に親子で過ごす空間で、親子の絆による共生の時間を共有できることが特徴となっている。我が国では類似した施設は

少なく、今後、必要とされている社会福祉の空間だ。

山梨県北杜市にある小さな直販店「ゆめ(夢)屋」を経営しているのが利根川一雄・美智子さん夫婦だ。定年退職後に、季節ごとの果樹や自家製の野菜を中心に販売している「ゆめ屋」を設立した。もちろん野菜栽培は無農薬で、除草剤の使用はしていない。

一般に販売されている野菜とは異なり、えぐみがなく、ほんのりと甘い野菜だ。ここには、小口医師もよく訪れている。小口医師は、新生児医療を先駆的に取り組んで

里山医療へのチャレンジ

きたおり、難病を持つ子どもたちに本物の食べ物を食べさせたいと考えてきた。

その背景には、過度な除草剤や農薬の散布が難産などの原因の一つという考え方もある。利根川夫婦はこの考え方を理解して、小口医師たちの活動を見守っている。ここに医食同源という思想が垣間見えてくる。

14年に「ゆめ屋」の隣地に「あおぞら共和国」の建設が始まった

夢を主宰する利根川一雄さん(左)と小口弘毅医師

た。地元の出身の小口医師を中心に、「みんなのふるさと」夢プロジェクトを立ち上げた。このプロジェクトは、八ヶ岳と甲斐駒岳に抱かれた美しい自然の中で、難病の子どもと家族が医療者とボランティアのサポートを受け、仲間と共にいつでも集まり自由な時間を過ごす里山のような場所をつくるのが目的だ。

また、それを支援するボランティアの若者たちや医療関係者にとつても、障がい者と共に生きる心と技を育むよい機会になることが目標となっている。この施設建

設の構想は、太陽光や風力利用などエコシステムを導入して自然環境の素晴らしさを最大限に取り入れたものとして企画されている。

まさに、里山医療による共生社会のモデルとして今後に期待したい。この基本には、食×農×福祉の連携を背景とした既存の福祉や医療のあり方への挑戦といえそう

(NPO法人地域福祉研究室 pi pi 理事長 渡邊洋一)

